

『徒然草』の文体は明晰か？

小池清治

キーワード：和文体・雅文体・擬古文体，和漢混淆体，漢文訓読体，
文体模写（パスティーシュ），誤用，文体指標，金閣寺型作品

『徒然草』が書かれたと推定される元徳 2 年（1330）の頃は驚天動地の時代であった。15 代、150 年ほど続いた鎌倉幕府（1192？～1333）は、文永 11 年（1274）及び弘安 4 年（1281）の二度にわたる元寇により、屋台骨に狂いが生じ、やがて新田義貞（1301～1338）や足利尊氏（1305～1358）らの活躍によって倒されてしまう。こうして成就した建武の中興（1333）ではあるが、後醍醐天皇（在位 1318～1339）による親政政府も、わずか 2 年半で呆気なく崩壊し、建武 3 年（1336）には南北朝時代に突入する。そして、同時に、足利尊氏によって室町幕府（1336～1573）が開幕される。

このように国体が二転も三転もする動乱期に、兼好（1283 頃～1352 頃）は、「つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ、ものぐるほしけれ」と、澄まし返って閑文字を弄んでいるかのように見えるのだが、実はそうではない。

兼好は新時代にふさわしい、明晰な文体を求めて、文体改革戦線で孤独な戦いを必死に戦っていたのである。

『徒然草』の文体は、雅文体（擬古文体）と漢文訓読文体、和漢混淆体の三種類の文体の混成作品である。

雅文体は、和文体にしては稀有の切れ味を示す『枕草子』の文体の文体模写（パスティーシュ）によってなされようとしている。漢文訓読体はカタカナ漢字交り文で表記されるのが普通であるが、兼好は、ひらがな漢字交り文で認めている。彼の文体改革は『枕草子』の文体模写から始められたのであるから、これは当然の帰結なのだ。

文体の相違は、伝えようとするメッセージと密

接に関連する。雅文体（擬古文体）は王朝的雅の世界への憧れと関連し、漢文訓読体は仏典・漢籍への傾倒と関連し、和漢混淆体は自在な個性的主張とに関連するという具合である。

『徒然草』が『枕草子』を座右に置いて執筆されたものであろうということは、多くの研究者の指摘するところである。

『枕草子』と『徒然草』はひらがな漢字交り文という共通点を有するが、決定的相違がある。それは、『枕草子』が清少納言の生得の日常語を基礎として書かれた言文一致体であるのに対して、『徒然草』は兼好法師が意識して学びとった、300 年以上も前の平安朝の貴族の、女性の言葉で書かれた点である。端的に言えば、『枕草子』の文体は和文体であり、『徒然草』の文体は雅文体、擬古文体であった。

小林秀雄は『徒然草』の文体を評して、「正確な鋭利な文体は稀有のものだ。」と述べているが、これは、たぶん褒め過ぎだろう。兼好は、和文の有する、だらだら文の欠点を克服しようとしたが、和文の有する不透明さを克服しきっていない。

込み入った思想をも語り得る、歯切れのよい、明晰な、ひらがな漢字交り文は漢文訓読体、和漢混淆体から生まれた。これは、当然、男も使える文体なのである。

金閣寺は、第 1 層平安朝風寝殿造り、第 2 層和風仏殿造り、第 3 層唐様禅宗仏殿造りである。

『徒然草』は言葉による金閣寺であった。兼好は室町文化を先取りしている。

ここでも、国体の変革期に新しい文体が発生したことが証明された。

1 小林秀雄「徒然草」

—「あの正確な鋭利な文体は稀有のものだ。」は本当か？—

小林秀雄は「徒然草」という小品を昭和17年(1942)8月に書いている。

偶然なのであろうが、小林も、国家が国運を懸けて、国家総動員法(公布, 1938)のもとに、太平洋戦争(1941~1945)を戦っているという大騒乱の最中に、『徒然草』に正対していたのである。おそらく、彼は意識していなかったであろうが、このような時期には、誰でもどこか昂奮しているものだ。冷静な批評家も平静を保つことが困難なことであつたらう。

小林はこう書いている。

「つれづれ」といふ言葉は、平安時代の詩人等が好んだ言葉の一つであつたが、誰も兼好の様に辛辣な意味をこの言葉に見付け出した者はなかつた。彼以後もない。「徒然わぶる人は、如何なる心ならむ。紛るゝ方無く、唯独り在るのみこそよけれ」兼好にとつて徒然とは「紛るゝ方無く、唯独り在る」幸福並びに不幸を言ふのである。(中略)兼好は、徒然なる俣に、徒然草を書いたのであつて、徒然わぶるまゝに書いたのではないのだから、書いたところで彼の心が紛れたわけではない。紛れるどころか、眼が冴えかへつて、いよいよ物が見え過ぎ、物が解り過ぎる辛さを、「怪しうこそ物狂ほしけれ」と言つたのである。(中略)

文章も比類のない名文であつて、よく言はれる枕草子との類似なぞもほんの見掛けだけの事で、あの正確な鋭利な文体は稀有のものだ。一見さうは見えないのは、彼が名工だからである。「よき細工は、少し鈍き刀を使ふ、といふ。妙観が刀は、いたく立たず」、彼は利き過ぎる腕と鈍い刀の必要とを痛感してゐる自分の事を言つてゐるのである。物が見え過ぎる眼を如何に御したらいいか、これが徒然草の文体の精髓である。(中略)

鈍刀を使つて彫られた名作のほんの一例を引いて置かう。これは全文である。

「因幡の国に、何の入道とかやいふ者の娘容美しと聞きて、人数多言ひわたりけれども、この娘、唯栗のみ食ひて、更に米の類を食はざりければ、斯る異様の者、人に見ゆべきにあらずとて、親、許さざりけり」(四十段)

これは珍談ではない。徒然なる心がどんなに沢山な事を感じ、どんなに沢山な事を言はずに我慢したか。

溜め息が出るほど、格好のいい文章だ。凄みがあると評してもいい。ただし、小林の「刀は切れ過ぎた」のではないかと思う。この短い大演説が利いたためか、『徒然草』の文章は明快だという伝説が生まれてしまった。

小林秀雄の遥かな後輩、橋本治は、「兼好法師の文章は、よく『近代の日本語の先祖』というような言われ方をします。つまり、兼好法師の文章は、現代人でもそのまま読めるんです。」と、絶賛している。

小林も橋本も『徒然草』の全文を読んでいるのだろうか？ 全文を読んで、なお、かつ、このような感想を有したとすれば、二人とも読解力がないと判定せざるをえない。

たとえば、小林が「名作」と折り紙をつけた「四十段」にも問題がある。「人数多言ひわたれども……」と兼好は書いているが、これは明らかにおかしい。

- ・あまた =①多く。たくさん。
- ②(程度について)非常に。甚だしく。
- ・言ひわたる=①言い続けて日を経過する。
- ②(男女の間などで)長い間言い寄る。

「あまた」は個体や事態の数量に関する副詞である。一方、「言ひわたる」の「一わたる」は動作の反復または継続を意味する補助動詞であり、「言ひわたる」は、「ずっと言い続ける／ずっと言い寄り続ける」の意味なのだ。したがって、「数多」と「言ひわたる」は共存しえない。兼好は「人数多言ひ寄れども……」と書くべきであつた。

ついでに言えば、「妙観が刀はいたく立たず。」(第229段)もおかしい。「腕が立つ」ということ

はある。「筆も立つ」。しかし、「刀が立つ」という慣用句は存在しない。兼好はなにか勘違いをしているのだろう。誤用である。

そもそも、序段の「ものぐるほしけれ」にも問題がある。言い立てると切りがないのだが、序段については、次節において詳述する。

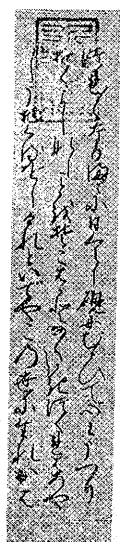
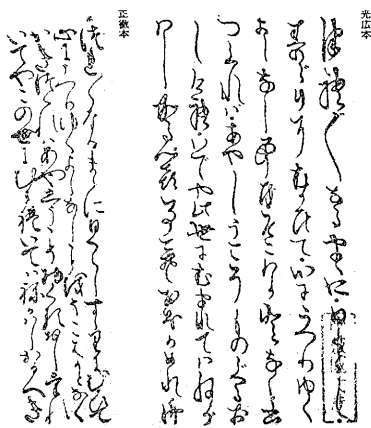
誤用の文体に及ぼす影響は、その存在により雑音や濁りが生じて、文章の明晰度を低くするというものである。四十段の文章には誤用がある。したがって、小林が絶賛するほどの出来ではない。

結論をあらかじめ述べておく。

兼好にとって、古典語は後天的に習得したものである。『徒然草』の文体としての欠点のすべては、ここに原因がある。擬古文体の胡散臭さの発生源は、古典語運用の未熟さにある。人は生得の言語、習熟しきった言語で書かない限り、透明度の高い、明晰な文章を書くことができない。明晰な文体を支えるものの一つは使用言語についての熟練度である。

2 序段「ものぐるほしけれ」の意味は？

『徒然草』の代表的伝本として、正徹本(図版1)、光弘本(図版2)、陽明文庫本(図版3)、常縁本(図版4)等がある。いずれも、ひらがな漢字交り文であることを、まず確認しておく。



陽明文庫本『徒然草』



次に、「ものぐるほしけれ」についての解釈の相違を検討する。

- a1 西尾 實 訳
「ふしぎなほど、いろいろな思いがわいてきて、ただごとではないような感興を覚える。」(1957)
- b1 富倉徳次郎 訳
「われながら妙に狂いじみたものができてゆくように思われるよ。」(1960)
- a2 臼井 吉見 訳
「まるで憑かれたかのように、感興にひきこまれるのは、われながらへんな気がする。」(1962)
- c1 安良岡康作 訳
「妙にわれながらばかばかしい気持がすることである。」(1967)
- b2 富倉徳次郎・貴志正造 訳
「気違いじみている。常軌を逸している。」(1975)
- b3 木藤 才蔵 訳
「妙に気違いじみた気持ちができることである。」(1977)
- b4 桑原 博史 訳
「ほんとうに変に常軌を逸しているようにも感じられる。」(1977)
- c2 小松 英雄 訳
「変てこで、ばかみみたいな気分になってくる。書いた自分があきれかえるような、とりとめのない事柄ばかりだ。」(1983)
- b4 久保田 淳 訳
「奇妙に狂気じみているよ。」(1989)
- d 永積 安明 訳
「我ながらあやしくも、もの狂おしい気持ちができる。」(1995)

序段のキーワードとも解せられる「ものぐるほしけれ」の解釈について、定説というものが無い。少なくとも、a説「感興を覚える」、b説「気違いじみている」、c説「ばかばかしい」、d説「もの狂おしい(頭が変になる)」と四通りの解釈が成立し得るということである。

これでは、兼好の真意がどこにあったのか分か

らない。即ち、序段の文章の明晰度はきわめて低いということだ。

「小林秀雄先生、まさか、序段は読んだのでしょうか？」と言いたくなる。因みに、小林の読みは、b説であるようだ。

ところで、正解はどの説なのであろうか？あるいはこれらとは別の解釈が成立するのだろうか？兼好が古典語を『枕草子』を中心に学んだことは確実である。「ものぐるほし」という形容詞が『枕草子』ではどうなっているかを知ることが正解への近道であろう。

- c 御前に参りてまの啓すれば、また笑ひさわぐ。御前にも、「など、かく物狂ほしからむ」と笑はせたまふ。(僧都の御乳母のままなど)
- c 「宣方は『いみじう言はれにたり』と言ふめるは」と仰せられしこそ、物狂ほしかりける君とこそおぼえしか。(宰相の中将齊信)
- c 「白山の観音、これ消えさせたまふな」と祈るも、物狂ほし。(職の御曹司におはします頃、西の廂にて)
- c 夜も起きあて言ひなげけば、聞く人、物狂ほしと笑ふ。(同上)
- d さしもやあらざらむとうちたゆみたる舞人、御前に召すと聞こえたるに、物にあたるばかり騒ぐも、いといと物狂ほし。(なほめでたき事)
- c 昨日は車一つにあまた乗りて、二藍の同じ指貫、あるは狩衣など乱れて、簾解きおろし、物狂ほしきまで見えし君達の、齋院の垣下にとて、日の装束うるはしうして、今日は一人づつさうざうしく乗りたる後に、をかしげなる殿上童乗せたるもをかし。(見物は)
- d 牛の鞆の香の、なほあやしう、嗅ぎ知らぬものなれど、をかしきこそ物狂ほしけれ。(いみじう暑き頃)

どうやら、あまり深刻な状態を意味している気配はないようだ。笑いの対象になっている。c説の「ばかばかしい」、d説の「物狂おしい(頭が変になる)」が妥当な説ということになりそうである。

ところで、「ものぐるほしけれ」の問題は、正確には語義の曖昧性であり、文体からくる曖昧性で

はない。次に、文体から生ずる曖昧性について述べよう。

3 わけのわからない友人論・交友論

第12段は「友人論」「交友論」である。これが難解である。

おなじ心ならん¹人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まん²こそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、³つゆ違はざらん³と向ひみたらん⁴は、ひとりあるここちやせん⁵。

たがひに言はん⁶ほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いささか違ふ所もあらん⁷人こそ、「我はさやは思ふ」など、⁸あらそひにくみ、「さるから、さぞ」ともうち語らはば、つれづれ慰まめ⁸と思へど、げには、すこしかこつかたも我とひとしからざらん⁹人は、大方のよしなしごと言はん¹⁰ほどこそあらめ¹¹、まめやか心の友には、はるかに隔たる所のありぬべきぞ、わびしきや。

ひらがな漢字交りの和文の欠点の一つは、言文一致体の必然として露呈する、話し言葉的だらだら文にある。第12段は驚くことに2文で構成されている。典型的だらだら文なのである。これが、この文章の明晰度を著しく低下させている。

もう一つの欠点は過度の省略がなされがちとなることにある。言文一致体の文章は、うっかりすると、この欠点を含有してしまう。

上に引用した文章には、少なく見積もっても三箇所、A、B、Cの前に省略がある。この省略が明晰度を極端に落としている。

Aの前には、「あきらめるほかない。しかし」のような表現が、Bの前には、「……と言って面白いのだが、それも度が過ぎると」のような表現が、Cの前には、「しかし」などの表現が省略されている。これでは、まるで、暗号のようになってしまう。

最後の欠点は同一語の反復使用である。この文章には、推量、仮定の助動詞「ん」が11回も使用

されている。仮定に仮定を重ねては何を言っているのかわからなくなるのも当然だ。このようなことを書いては、たしかに「ものぐるほし」くなる。

兼好は、和文体の欠点をしかと自覚していなかったようである。だから、小林のように、手放しで、『徒然草』の文体を褒め上げることは間違いないのだ。

しかし、このような、だらだら文、過度の省略、同一語の反復使用は例外的である。概ね、短文を重ねる、歯切れのよい、『枕草子』の随想的章段の文体に学んでいる。

4 滑稽とも、悲惨とも言える二葉亭四迷による『枕草子』の文体模写

二葉亭四迷も文体の発達に大いに寄与した人である。その彼が『新編浮雲』全3巻を世に出した後、言文一致体についての失敗感、敗北感に苛まれていた。この苦しさから逃れるため、言文一致運動の旗頭であった彼は、なんと文語文を代表する『枕草子』の文体に学ぼうとして文体模写に励むのである。滑稽と言うべきか悲惨と評すべきか、言葉を失う。

清少納言が筆つきまねんとおもひおこして枕草紙をとりいでよむに言葉のつづけざまいととをかしうてまねやすからずなんある。されど本居の翁の筆つきはさしもあらぬにや

いと小さき童のきりかぶろといふかしらのつきたりしが紅き白き糸もてかざりたる鞆などもちていとうれしとおもひがほに頬などに押しあてたるいみじう愛けしましてえみたるは愛らしなどいふは世の常なり（『落葉のはきよせ』二籠目）

これは、『枕草子』の「うつくしきもの」などを思い浮かべて、文体模写を試みたものであろう。『枕草子』には「愛けし」「愛らし」という形容詞がないなど、文体模写としての精度は低いのであるが、二葉亭四迷が、和文の典型、散文表現の模範として『枕草子』の文体を選んだということは

間違いない。どうやら『枕草子』の文体は、人に、まねてみようという気を起こさせる魅力を有している文体であるようだ。

5 『徒然草』の雅文体

まず、『徒然草』の冒頭文にあらわれる単語が『枕草子』ではどのように使用されているか調べてみよう。

①つれづれなる

枕 「過ぎにし方恋しきもの」

また、をりからあはれなりし人の文、つれづれなる日、さがし出でたる。

「心ゆくもの」

つれづなるをりに、いとあまりむつまじうもあらぬまらうどの来て……

「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」

二月のつごもり方、いみじう雨降りてつれづれなるに……

「五月の御精進のほど」

一日より、雨がちに曇りすぐす。つれづれなるを……

「正月寺に籠りたるは」

つれづれなるに、傍らに貝をにはかに吹き出でたるこそ、いみじう驚かるれ。

「つれづれなるもの」

つれづれなるもの 所去りたる物忌。馬下りぬ双六。除目に司得ぬ人との家。雨うち降りたるは、まいていみじうつれづれなり。

「この草子」(跋文)

この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見むと思ひて、つれづれなる里居のほどに、書きあつめたるを、あいなう人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば、よう隠しおきたりと思ひしを、心よりほかにこそ洩り出でにけれ。

②ままに

枕 「かたはらいたきもの」

にくげなるちごを、おのが心地のかなしきままに、うつくしみかなしがり……

③日暮らし

枕 「関白殿、二月二十一日に、法興院の」

講はじまりて、舞ひなどす。日暮らし見る

に、目もたゆく苦し。

④あやしうこそ

枕 「五月ばかり、月もなういと暗きに」
あやしうこそありつれ。

⑤ものぐるほしけれ

枕 「いみじう暑き頃」
さやうなるに、牛の鞆しりがひの香の、なほあやし
う、嗅かぎ知らぬものなれど、をかかしうこそ
ものぐるほしけれ。

さすが、藤原よじわらの為世門下和歌四天王の一人、古典
を読みこなしている兼好である。二葉亭四迷より
巧みだ。『枕草子』の語彙を確実に使用している。
清少納言は跋文において、「つれづれなる里居」
の折に、『枕草子』を書いたと書いている。兼好は、
冒頭において、「つれづれなるままに」書いたと書
く。『徒然草』の書名は『枕草子』からの戴きもの
であるのだろう。

次に、第1段では、清少納言、その人の名が出
てくる。

法師うらやばかり羨うらやましからぬものはあらじ。
「人には木のはしのやうに思はるるよ」
と清少納言が書けるも、げにさることぞ
かし。

枕 「思はむ子を」

思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦し
けれ。ただ木の端などのやうに思ひたるこ
そ、いとほしけれ。

兼好は『徒然草』を書く際に、『枕草子』を座右
の書としていたのであろう。

第19段には、『枕草子』の書名まで出てくる。

また、野分のわきの朝あしたこそをかしけれ。いひ
つづくれば、みな源氏物語・枕草子など
にことふりにたれど、おなじ事、また、
今さらに言はじともあらず。

どうやら、『徒然草』の一部は、『枕草子』の文
体模写と判断してよい。したがって、表記方法は
当然、ひらがな漢字交りということになる。

ただし、『枕草子』と『徒然草』の間には、約
300年の歳月が流れている。この間、日本語は大
きく変化した。清少納言にとって、和文は言文一
致体であったが、兼好にとっては言文一致体では
なかった。『徒然草』は生得の言語による作品では
なく、後天的に習得した言語による作品なのであ
る。『徒然草』の言語を古典語と比較すると種々の
問題が出てくることも確かなのである。

6 『徒然草』が擬古文である理由

第8段に、次のような表現が出てくる。

久米の仙人の、物洗はぎふ女の脛はぎを見て、
通失つうひけんは、誠に、手足はだへなどの
きよらきよらに肥えあぶらづきたらんは、外の
色ならねば、さもあらんかし。

この「きよらに」は変だ。『源氏物語』で「きよ
ら」が使用されるのは、光源氏、冷泉帝、朱雀帝、
藤壺中宮、紫の上など超一流の美男美女に対して
である。光源氏のお子である夕霧にさえ、紫式部
は二流の美を意味する「きよげ」を用い、「きよら」
を使用することは控えている。そういう超一級の
美を表すのが古典語における「きよら」なのであ
るから、「物洗ふ」庶民の女に使用するはずがない。
兼好はそのことを知らなかったようだ。第16段
には、次のような表現がある。

おほかた、ものねの音ねには、笛ひちりき・箏ね。常
に聞ききたききは、琵琶びわ・和琴わこん。

助動詞「たし」は、平安時代後期に使われ始め
た語である。『枕草子』や『源氏物語』であれば、
「常に聞かまほしきは」とあるべきところである。

枕 「ねたきもの」

見まほしき文などを、人の取りて、庭に下
りて見たるが、いとわびしくねたく…

ところが、『徒然草』では「まほし」を使用する
一方、「たし」が多用されている。

・ありたき事は、まことしき文の道さくもん。作文。和歌。

管弦の道。第1段

- ・わが食ひたき時、夜中にも暁にも食ひて 第60段
- ・(乗馬や早歌を) いよいよしたく覚えて、嗜みけるほどに 第188段

助動詞で言えば、可能の助動詞「る・らる」や過去・回想の助動詞「き」「けり」の用法なども変なものがあるが、例示はもう十分であろう。このような語彙のレベルの誤用は罪の軽い方である。問題は、古典語の要の一つ、係り結びの用法において誤用があることである。

7 『徒然草』における係り結びの誤用

『徒然草』には古典語の特徴である係り結びにおいてさえも誤用がある。その誤用の在り方は、「ぞ」「なん」などの係助詞なしで連体形で結ぶという誤用である。次にその具体例を示す。

ア 回想の助動詞「けり」を「ける」とする誤用

- ①「子孫あらせじと思ふなり」と、侍りけるとかや。(第6段)
- ②新院のおりさせたまひての春、詠ませたまひけるとかや。(第27段)
- ③返す返す感ぜさせたまひけるとぞ。(第48段)
- ④大納言入道、負けになりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。(第135段)
- ⑤感涙をのごはれけるとぞ。(第145段)
- ⑥その人、古き典侍なりけるとかや。(第178段)
- ⑦まことに、ただ人にはあらざりけるとぞ。(第184段)
- ⑧あへて凶事なかりけるとなん。(第206段)
- ⑨亀菊に教へさせたまひけるとぞ。(第225段)
- ⑩興ありて、人ども思へりけると、ある人、北山太政入道殿に語り申されたりければ……。(第231段)
- ⑪「興あらん」とて、はかりたまひけるとぞ。(第238段)

- *「ける」を「けり」とする誤用もある。格助詞「が」がある場合は連体形となる。
- ・この文、清行が書けりといふ説あれど……。

(第173段)

イ 回想の助動詞「き」を「し」とする誤用

- ①その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。(第32段)
- ②かく柔らぎたる所ありて、その益もあるにこそと覚え侍りし。(第141段)
- ③をかしく覚えしと、人の語りたまひける、いとをかし。(第231段)

ウ 完了の助動詞「つ」を「つる」とする誤用

- ①いつよりも、ことに今日は尊く覚え侍りつると感じ合へりし返事に(第125段)

エ 伝聞の助動詞「なり」を「なる」とする誤用

- ①奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなると人の言ひけるに(第89段)

オ 補助動詞「侍り」を「侍る」とする誤用

- ①李部王の記に侍るとかや。(第132段)
- ②九の巻のそこそこの程に侍ると申したりしかば(第238段)

第160段は、兼好の動詞の終止形に関する意識を現す興味深い文章である。

門に額かくるを、「打つ」といふはよからぬにや。勘解由小路二品禅門は、「額かくる」とのたまひき。「見物のたき打つ」もよからぬにや。「平張打つ」などは、常のことなり。「たき敷かまふる」などいふべし。「ごま護摩たく」といふもわろし。「修する」「ごま護摩する」などいふなり。「行法も、法の字を清みていふ、わろし。濁りていふ」と、清閑寺僧正おほせられき。常にいふ事に、かかる事のみ多し。

平安時代末期、院政期(開始, 1086)頃より、用言の連体形が終止法を獲得する、連体形の終止形同化という言語現象が発生し、勢いを増していく。兼好の頃には、この現象がすべての動詞に及ぶという段階に入っていたことを上記の文章は語っていると判断される。二重下線を施したもの

は、古典語としては連体形であるが、兼好はこれらを終止形と意識していたのだろう。

彼の生得の言語は、古典語とは質の異なる言語であったということになる。

8 和漢混淆体で書かれた段 一和語と漢文訓読語彙一

平安時代、漢文訓読専用の語彙、漢文訓読語が男性語として日本語の中に位置を占めるようになった。その結果、語彙は、男女共用の和語語彙と男性専用の漢文訓読語彙に二分されるようになる。

『徒然草』には、和語と漢文訓読語彙が共存する。対応する語彙と所属する段とを下の表に示す。

*第19段には、「多かり」という和文系の語彙と「多シ」という漢文訓読系の語彙が共存している。兼好にはこういう区別ができなかったという可能性がある。

漢文訓読語彙「多シ」が使用されている第7段の文章は、次のようなものである。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ち去らでのみ住みはつる習ひならば、いかにもののあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮すほどだにも、こよなうのどけ

しや。飽かず惜しと思はば、千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせん。命長ければ辱多し。長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば、かたち恥づる心もなく、人に出で交らはん事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみ深く、もののはれも知らずなりゆくなん、あさましき。

『源氏物語』「桐壺」にも見られる「命長ければ辱多し」の成句の中で、「多シ」が使用されている。表現技法としては、対句が3例ほどあり、基調文体は漢文訓読体としてよいのだが、この文章の末尾において、読み手、聞き手への働きかけ、即ち、モダリティーを表す、係助詞「なん」による係り結び表現が用いられている。これは、和文専用のもので、漢文訓読においては、決して用いられることがなかった表現なのである。

漢文訓読文体を基調としながら、和文の表現が交じる文体を和漢混淆体という。『徒然草』には、この種の文章が漢文訓読体のものに匹敵するほど存在する。

なお、『徒然草』を代表する文章の一つ、第19段には、「多かり」と「多シ」が共存し、典型的和

和語	多かり	1, 13, 15, *19, 30, 80, 137, 140, 141, 142, 174, 240
漢文訓読語彙	多シ	7, 9, 14, *19, 38, 67, 122, 123, 130, 160, 166
和語	いと	1, 3, 10, 15, 19, 25, 29, 30, 32, 39, 44, 56, 57, 67, 68, 102, 104, 105, 106, 107, 109, 116, 120, 124, 125, 128, 137, 139, 141, 142, 145, 150, 168, 170, 175, 184, 189, 190, 191, 208, 209, 221, 231, 236, 238, 240
	いとど	59, 73
漢文訓読語彙	甚ダ	92, 132, 155, 166
	甚ダシク	107
和語	様に	1, 14, 42, 51, 53, 56, 59, 60, 66, 70, 73, 81, 82, 84, 107, 116, 137, 142, 175, 188, 194, 213, 230, 231, 234
漢文訓読語彙	如ク	73, 74, 77, 106, 166, 175, 183, 217

漢混淆体の文体となっている。

- ・すべて、思ひ捨てがたきこと多し。
- ・とりあつめたる事は、秋のみぞ多かる。

漢文訓読語彙「甚ダ」が使用されている第132段の文章は、次のようなものである。

鳥羽の作道は、鳥羽殿建てられて後の号にはあらず。昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の声、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞こえけるよし、李部王の記に侍るとかや。

漢文訓読体を基調としながら、この文章においては、丁寧語「侍り」が使用されている。これも和漢混淆体である。「侍り」という、聞き手、読み手に対する配慮を表す表現、即ち、モダリティーに関する語は、純粋な漢文訓読では決して使用されない。

おそらく、兼好の日常言語としては、「なん」も「侍り」も使用されることがなかったものなのであろう。新しい文体を作り出すために、動員されたものと推測する。

9 漢文訓読体の文章

最後に、漢文訓読体のみで書かれた文章を検討する。

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢たばさみて的に向ふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、はじめの矢に等閑の心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて、一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ、万事にわたるべし。

道を学する人、夕には朝あらんことを思ひ、朝に夕あらんことを思ひて、かさねてねんごろに修せんことを期す。いはんや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心

ある事を知らんや。何ぞ、ただ今の一念において、ただちにする事の甚だかたき。

このほか「毎度／得失／懈怠／万事／一刹那」

和文系表現 (男女)	漢文訓読系表現 (男)
	イハク←いふやう
	持ツコトナカレ←な持ちそ/持つな
	定ムベシ←定めむ
	前ニテ←前で
	イヘドモ←いへ/いへど
	ワタルベシ←わたらむ
	学スル←まねぶ/まなぶ/ならふ
	修セン←おさむ/ならふ/まなぶ
	期ス←おきつ/待ち設く
	イハンヤ←ましてや
	ニオイテ←で
	何ゾ←いかに
	タダチニ←すぐ/すぐに
	甚ダ←いと/いとど

も勿論漢文訓読系の語彙である。

第92段には対句もあり、典型的な漢文訓読体の文体で書かれたものといえることができる。

10 文体の分布とその意味

三種類の文体が、どのように分布しているのか調べてみよう。

雅文体の段、167段(68.4%)、和漢混淆文体の段、40段(16.4%)、漢文訓読文体の段、37段(15.2%)の構成になっている。

『徒然草』は、『枕草子』の文体模写から始められたが、それに終ることなく、漢文訓読体、和漢混淆体へと筆が及んでいる。文体の明晰さということを探ると、漢文訓読体や和漢混淆体に頼らざるをえないというのが兼好の実感であったろう。

従来、これらの文体はそれぞれ別個に機能してきたのであるが、『徒然草』において融合し、必要に応じて、同一作品においても、自在に使用し得るということが示された。室町幕府第3代將軍足利義満(1358～1408)は応永4年(1397)に金閣寺(鹿苑寺)を建築している。この建物の第1層は平安時代風の寝殿造り、第2層は和風仏殿造り、第3層は唐様禅宗仏殿造りとなっている。即ち、和風、和漢混淆風、中国風の混成建築物なのである。

兼好は義満が建てた金閣寺の60年以上も前に、

段	文体指標	文体	主題	段	文体指標	文体	主題	段	文体指標	文体	主題
序	つれづれ	雅	序詞	71	こそ	雅	既視感	142	まほし	雅	恩愛
1	多かり・様に	雅	王朝美	72	多シ・いやしげ	和漢	物尽	143	いみじ・対句	雅	終焉
2	侍り	雅	質素	73	いみじ・ゴトク	和漢	虚言	144	たまふ	雅	梅尾上人
3	いと	雅	優雅	74	ゴトク	漢文	変化の理	145	ゴトシ・侍り	和漢	重躬逸話
4	こころにくし	雅	信仰	75	対句・こそ	和漢	閑居	146	たまふ	雅	明雲逸話
5	あらまほし	雅	悟り	76	こそ	雅	法師	147	とぞ	雅	有職
6	侍り	雅	子孫	77	こそ・ゴトク	和漢	嗜	148	ザレバ	漢文	有職
7	対句・なん	和漢	処世	78	こそ	雅	話題	149	ベカラズ	漢文	有職
8	如カズ・きよら	和漢	色欲	79	いみじ	雅	交際	150	ドモ	漢文	芸能
9	対句・侍り	和漢	愛欲	80	対句・多かり	和漢	武論	151	イハク	漢文	芸能
10	いと・侍り	雅	住居	81	よきなり	雅	調度	152	申す	雅	資朝逸話
11	侍り	雅	暮し方	82	侍り	雅	古びの美	153	率て行く	雅	資朝逸話
12	だらだら文	雅	交友	83	侍り	雅	竹林院逸話	154	たまふ	雅	資朝逸話
13	多かり	雅	読書	84	侍り	雅	弘融逸話	155	ゴトシ	漢文	無常迅速
14	様に・多シ	和漢	文学	85	対句	漢文	舜の徒	156	申す	雅	故実
15	多かり・いと	雅	旅	86	いみじ	雅	惟繼逸話	157	対句・ましかば	和漢	悟り
16	おもしろけれ	雅	音楽	87	侍り	雅	具覚房逸話	158	侍り	雅	有職
17	つれづれ	雅	信仰	88	けり	雅	道風笑話	159	おほす	雅	みな結び
18	対句・いみじ	和漢	無所有	89	けり	雅	猫また	160	のたまふ・多シ	和漢	言葉遣い
19	多かり・多シ	和漢	季節感	90	イハク	漢文	乙鶴丸笑話	161	おほやう	雅	花の盛り
20	こそ・けれ	雅	世捨人	91	対句	漢文	吉凶	162	侍り	雅	承仕逸話
21	漢詩・こそ	和漢	隠者	92	イハク	漢文	弓道	163	侍り	雅	盛親逸話
22	いみじ	雅	尚古	93	イハク	漢文	命笑話	164	多シ	漢文	無益の談
23	いみじ	雅	皇居	94	申す	雅	常磐井逸話	165	ズシテ	漢文	交際
24	いみじ	雅	神道	95	侍り	雅	有職	166	ゴトシ	漢文	雪仏
25	対句・侍り	和漢	変転	96	なん	雅	めなもみ	167	タトヒ	漢文	論争
26	侍り	雅	変化	97	物尽	雅	損なう	168	いと	雅	老人の弁え
27	こそ	雅	譲位	98	侍り	雅	一言芳談	169	侍り	雅	何事の式
28	あはれ	雅	諒闇	99	申す	雅	基具逸話	170	いと	雅	阮籍青眼
29	いと	雅	形見	100	奉る	雅	通光逸話	171	ズシテ・侍り	和漢	脚下照己
30	対句・行きあかる	和漢	中陰	101	いみじ	雅	康綱逸話	172	多シ	漢文	老人
31	こそ	雅	手紙	102	たまふ	雅	光忠逸話	173	たまふ	漢文	小野小町
32	侍り	雅	月見	103	参る	雅	忠守笑話	174	シカナリ・多かり	和漢	仏道
33	いみじ	雅	皇居	104	きよら	雅	物語	175	いと	雅	酔態
34	侍り	雅	有識	105	えもいはぬ	雅	物語	176	たまふ	雅	黒戸
35	うるさし	雅	書道	106	落してげり	雅	証空逸話	177	いみじ	雅	故実
36	侍り	雅	言葉遣	107	侍り	雅	女性論	178	けるとかや	雅	御剣
37	げにげにし	雅	交友	108	対句	漢文	寸陰惜しむ	179	号ス・申す	和漢	道眼上人
38	対句・いみじ	和漢	処世	109	侍り	雅	木登り名人	180	いふなり	雅	左義長
39	申す	雅	法然	110	侍り・然	和漢	双六	181	申す	雅	鳥羽院逸話
40	ドモ・さらに	和漢	説話	111	いみじ	漢文	伝聞	182	申す	雅	隆親逸話
41	侍り・ドモ	和漢	居眠	112	対句	漢文	覚悟	183	ズシテ	漢文	律の禁
42	長く	雅	行雅逸話	113	こそ	雅	老齡論	184	申す	雅	時頼の母
43	ど	雅	読書人	114	侍り	雅	公輔逸話	185	なんや	雅	康盛逸話
44	いと	雅	笛と男	115	申す・ドモ	和漢	ぼろぼろ	186	侍り	雅	馬乗り
45	なりけり	雅	良覚逸話	116	いと	雅	命名	187	イヘドモ	漢文	慎み
46	とぞ	雅	強盗法印	117	やんごとなし	雅	友人	188	ゴトシ・侍り	和漢	無常迅速
47	だらだら文	雅	くさめ	118	なん	雅	実兼逸話	189	ゴトシ・あらまし	和漢	無常一定
48	さぶらふ	雅	光親逸話	119	侍り	雅	鯉伝聞	190	心にくし	雅	独身主義
49	来タル・侍り	和漢	無常	120	侍り	雅	唐物	191	いと	雅	夜の美
50	侍り	雅	女鬼	121	対句・侍り	和漢	ベット	192	詣づ	雅	お参り
51	参る	雅	水車	122	多シ	漢文	教養	193	如カズ	漢文	文字法師
52	徒歩より	雅	仁和寺笑話	123	多シ	漢文	必需品	194	やうに・ゴトシ	和漢	虚言
53	言ふやう	雅	鼎笑話	124	イヘドモ・まほし	和漢	是法逸話	195	おはします	雅	通基逸話
54	いみじ	雅	稚児笑話	125	侍り・イハク	和漢	笑話	196	申す	雅	定実逸話
55	侍り	雅	家居	126	申す	雅	博打	197	こそ	雅	故実
56	いと	雅	話し方	127	短文	漢文	寸言	198	といふ	雅	故実
57	いみじ	雅	和歌	128	申す・対句	和漢	雅房逸話	199	侍り	雅	行宣法印
58	タトヒ・まほし	和漢	遁世功德	129	甚ダ	漢文	凌雲逸話	200	呉竹なり	雅	有職
59	ズシテ・いとど	和漢	大事	130	多シ	漢文	凌雲逸話	201	退凡	漢文	卒塔婆
60	申す・自由	和漢	盛親逸話	131	対句	漢文	身の程	202	多シ	漢文	神無月
61	たまふ	雅	有職	132	侍り	雅	有職	203	なりにけり	雅	有職
62	おはします	雅	謎歌	133	申す	雅	白河院逸話	204	とぞ	雅	有職
63	こそ	雅	阿闍梨逸話	134	侍り・ズシテ	和漢	悟り	205	たまふ	雅	有職
64	おほす	雅	有職	135	申す	雅	資季逸話	206	たまふ	雅	実基逸話
65	なりたるなり	雅	有職	136	さぶらふ	雅	篤成逸話	207	申す	雅	実基逸話
66	侍り	雅	有職	137	いと	雅	四季論	208	侍り	雅	弘舜僧正
67	侍り	雅	有職	138	侍り	雅	後の葵	209	もてゆく	雅	餅事
68	いみじ	雅	大根	139	侍り	雅	木草	210	きこゆ	雅	呼子鳥
69	たまふ	雅	書写逸話	140	多かり	雅	遺産	211	多シ・ぞ	和漢	処世
70	たまふ	雅	菊亭逸話	141	侍り	雅	堯蓮逸話	212	こそ	雅	秋の月

段	文体指標	文体	主題	段	文体指標	文体	主題	段	文体指標	文体	主題
213	申す	雅	有職	224	来タル・侍り	和漢	有宗入道	235	ざらまし	雅	虚空
214	来タル	漢文	相府蓮	225	申す	雅	白拍子	236	いみじ	雅	笑話
215	申す	雅	時頼逸話	226	たまふ	雅	行長逸話	237	侍り	雅	有職
216	侍り	雅	時頼逸話	227	けり	雅	六時礼賛	238	シム・いみじ	和漢	近友自賛
217	イハク・申す	和漢	大福長者	228	けり	雅	釈迦念仏	239	宿・清明	漢文	婁宿
218	なかりけり	雅	狐	229	いたく	雅	妙観が刀	240	いと	雅	結婚
219	イハク・侍り	和漢	隆資逸話	230	侍り	雅	為世逸話	241	タダチ	漢文	所願妄想
220	侍り	雅	天王寺の鐘	231	いと	雅	基氏逸話	242	如カズ	漢文	欲望
221	侍り	雅	有職	232	仰す	雅	無知無能	243	イハク	漢文	幼児の思出
222	申す	雅	陀羅尼	233	如カジ	漢文	処世				
223	申す	雅	基家逸話	234	心づきなし	雅	言葉遣い				

言葉による金閣寺を構築していた。換言すると、『徒然草』は金閣寺型作品であり、兼好は室町文化を先取りしていたのだ。

参考文献

- 『小林秀雄集』（現代日本文学大系 60, 筑摩書房, 1969）
- 橋本治『これで古典がよくわかる』（ちくま文庫, 2001）
- 小松英雄『徒然草抜書 解釈の原点』（三省堂, 1983）
- 山極圭司『徒然草を解く』（吉川弘文館, 1992）
- 西尾實校注『方丈記 徒然草』（日本古典文学大系 30, 岩波書店, 1957）
- 富倉徳次郎編『徒然草・方丈記』（日本古典鑑賞講座 18, 角川書店, 1960）
- 臼井吉見訳『徒然草』（古典日本文学全集 11, 筑摩書房, 1962）
- 安良岡康作『徒然草全注釈 上』（角川書店, 1967）
- 富倉徳次郎・貴志正造編『方丈記・徒然草』（鑑賞日本古典文学 18, 1975）
- 木藤才蔵校注『徒然草』（新潮日本古典集成, 新潮社, 1977）
- 桑原博史『徒然草の鑑賞と批評』（明治書院 1977）
- 久保田淳校注『徒然草』（新日本古典文学大系, 岩波書店, 1989）
- 永積安明校注・訳『徒然草』（新編日本古典文学全集, 小学館, 1995）
- 二葉亭四迷『二葉亭四迷集』（明治文学全集 17, 筑摩書房, 1971）
- 松村博司監修『枕草子総索引』（右文書院, 1967）
- 時枝誠記編『徒然草総索引』（至文堂, 1955）

On the Style of *YOSHIDA Kenkou's "Tsurezuregusa"*

KOIKE Seiji

Summary

YOSHIDA Kenkou, famous essayist in medieval Japan, made his best work using three kinds of writing style, namely classical Chinese, classical Japanese and mixed style. In other words, he build out The *Kinkakuji*, The Golden temple useing three kinds of ancient Japanese language.